銀色の殻に秘めた君の本心

エピソード1〜9 日本語訳まとめ

収録エピソード

エピソード1 銀色の殻の中で

エピソード2 銀色の殻を破って

エピソード3 銀色の殻に閉じ込められて

エピソード4 銀色の殻の亀裂

エピソード5 銀色の殻パズル

エピソード6 銀色の殻の痕跡

エピソード7 銀色の殻の残像

エピソード8 銀色の殻の欠片たち

エピソード9 銀色の殻の中の本心

EPISODE 1

銀色の殻の中で

ドクン――

???

竜族……

???

あいつら、たしか自分たちを竜族と言っていた気がする。

???

なら、わたくしもあいつらのように装っていれば、疑われずに済むでしょう？

???

地の底の石から生まれる存在たち……

???

そのひとりになりすまして、ひとまず正体を隠さなければ。

???

あいつらから見て、きらめいていて、なおかつ致命的な……何かが必要ね。そういうものを探さなくては。

ドクンドクン――

???

ゴホッ、ゴホッ……！ はぁ、はぁぁ……！

???

ううっ……うあああ！

???

内側が焼け焦げるみたい……！ 全身が痛い！ ううっ……！ うああっ！！

???

うううっ……くぅっ……！ 耐えなくちゃ……。

???

悩んで、悩み抜いて決めたことじゃない！ わたくしが自分で選んだことなのよ！

???

この苦しみ……母様の根の中へ、直接注ぎ込んでやる……！

???

わたくしが味わうこの苦しみ……！ 同じように味わわせてやるわ！！

ドクンドクン――

???

はぁ……ダイヤモンド、思ったより簡単に流される性格ではないのね。

???

母様をもっと苦しめるには地上へ上がって、偽善にまみれたあの世界を、わたくし自身の手で壊さなければならないのに……

???

ふん！ まあ、いいわ。

???

時間が解決してくれるでしょう。

???

母様が管理する世界が、まともに回るはずがないもの。

???

ダイヤモンドも時が経てば、その不条理さとおぞましさに気づくはずよ。わたくしのように。

???

それまでは……待てばいいの。

???

ゴホッ、ゴホッ……！ くしゅんっ！

???

体調もよくないし……眠りながら待つことにするわ。

???

だいたい千年くらいでいいでしょう？

ドクンドクン――

ヴィヴィ

ひゃああっ！！ これは一体どういうことですの？！

ヴィヴィ

わたくしの家が壊されておりますわ！！

ドリルマシン

こんにちは～。私はコアドリルマシン E-4500です～

ドリルマシン

32番組立工場で生まれた、できたてほやほやの掘削機でございます～

ドリルマシン

皆さまのお家を、心ごと粉砕するのが私の使命です～

ドクンドクン――

ヴィヴィ

ダイヤモンド……何ひとつ変わっていない。

ヴィヴィ

どうして……？

ヴィヴィ

エルフという連中のせいで、計画より早く目覚めることにはなりましたけれど……

ヴィヴィ

どうして、わたくしが眠りについた時と同じままなの？

ヴィヴィ

あなたはなぜ……わたくしが世界を見るようには見てくれないの？

ヴィヴィ

わたくしだけなの？ この世界が汚れていると感じるのは、わたくしだけなの？

ヴィヴィ

なぜ？ どうして？ 理解できない……！

ドクンドクン――

ヴィヴィ

ううっ……わたくし、何を言ってしまったの……？

ヴィヴィ

そんなつもりではなかったのに……急に頭に血が上ってしまって。

ヴィヴィ

そばでずっと世界の本当の姿を見せ続けていれば……ダイヤモンドも、いつかわたくしを理解してくれたはずなのに……！

ヴィヴィ

どうしてあんなひどいことを言ってしまったの！ この大馬鹿者！

ヴィヴィ

母様と同じだわ……。

ヴィヴィ

母様と同じことをしてしまった……！ ううっ……！

タタタッ――！

ドクンドクン――

ネティ

んん？ これは何ですかヨン？

ネティ

曲がり具合、強度、色まで……これはどう見ても銀……？ みたいですヨン～？

ネティ

変ですヨン？ 鉱脈から出たにしては、かなりきれいで大きな塊ですヨン……

ネティ

まさか……銀の竜族の卵～？

ドクンドクン――

ダーヤ

この卵がヴィヴィの住処から出てきたのか？

ダーヤ

新たな同族の卵ということか？

ネティ

はい、そうですヨン。

ネティ

私が調べたところ〜、銀脈の中心に居座って凝結した竜族の卵みたいでしたヨン。

ダーヤ

……

ダーヤ

そうか。

ダーヤ

そういうことだったのだな。

ネティ

ダーヤ様、落ち着きすぎじゃないですかヨン？ ヴィヴィに続いて二人目の銀の竜族が現れたんですよ。驚くべきことじゃないですかヨン？

ネティ

二人目のダーヤ様も、二人目のネティも生まれるかもしれない……

ネティ

はああ〜？ 二人目、三人目のオパールが生まれる可能性もあるんですかヨン？ とっても可愛い気もするけど、面倒でもありますヨン！

ネティ

オパール合唱団とか、野球チームを作ってもよさそうですヨン！

ダーヤ

そういうことではないのだ、ネティ。

ネティ

はい？

ダーヤ

ヴィヴィは、銀の属性ではなかったのだ。

ダーヤ

以前からおかしいとは思っていた。

ダーヤ

見た目や言葉とは異なる力を、たびたび見せていたからな。

ダーヤ

まるで……水銀のように。

ネティ

それなら……なぜ疑わなかったんですかヨン？

ネティ

はっ……！ ダーヤ様、まさか……！

ネティ

今まで銀の属性を知らなくて、今になって気づいたから、気まずくなって知っていたふりをしようとしているんですかヨン？！

ダーヤ

そ、そうではない……！

ダーヤ

友であるがゆえに、ただ信じていたのだ。

ダーヤ

ヴィヴィは見た目より繊細で、優しい者なのだ。

ネティ

あの高圧的で、独善的で、権威的で、口調まで変なヴィヴィがですかヨン？

ダーヤ

……

ダーヤ

口調なら、お前も変ではないか？

ネティ

ええ？ すごく衝撃的な言葉ですヨン！

ダーヤ

ともかく、この卵は私が預かる。

ネティ

どこへ持っていくつもりですかヨン？ 竜族がちゃんと生まれるには、同じ属性の鉱物の近くで大切に世話しないといけないはずですが……

ダーヤ

ヴィヴィに任せてみるのがよさそうだな。

ネティ

ええっ？ ですが……！ 竜族のみんながそう思うでしょうかヨン？

ダーヤ

大丈夫だ。

ダーヤ

ヴィヴィの住処は、銀の気が弱まっている。

ダーヤ

気が集中した別の銀鉱脈を探すなど、いつになるか分からぬこと。

ダーヤ

ヴィヴィが自分を銀の竜族だと偽っていたとはいえ……

ダーヤ

そのせいで、今までこの卵が日の目を見られなかったのではないか？

ダーヤ

ヴィヴィがたとえ嘘をついていたとしても、銀の属性を代替する部分があったからこそ、卵は孵化できないまま残っていたのだろう。

ネティ

ヴィヴィが……この卵をちゃんと孵化させてくれるでしょうかヨン？ ダーヤ様は本当に、それが可能だと思っているんですかヨン？

ダーヤ

信じるのだ。友だからな。

ネティ

分かりましたヨン。ダーヤ様の決定なら、信じて従いますヨン。

ダーヤ

ではネティ、竜族たちを全員集めてくれ。

ダーヤ

皆にこの事実を公表して、余計な誤解が生まれぬようにしたい。

ネティ

分かりましたヨン。今すぐみんなを集めてきますヨン〜

ドクンドクン——

ヴィヴィ

まだあなたを「銀」と呼ぶのは、少し違う気がいたしますわね。

ヴィヴィ

ひとまず、卵の状態ですし……鉱石、そして銀ですから……

ヴィヴィ

「銀鉱石」から「鉱」を抜いて、「銀石」はいかがですの？

ヴィヴィ

オホホッ！ 気に入ってくださったなら何よりですわ！

ヴィヴィ

では、これからあなたを「銀石」公とお呼びいたしますわ！

ドクンドクン——

ヴィヴィ

オホホッ！ 銀石公、言うことをよく聞くところを見るに、淑女としての素質にあふれておりますわね。

ドクン——

ヴィヴィ

銀石公、お変わりありませんこと？

ドクン——

ヴィヴィ

え、ええ……えっ？！ いけませんわ！ 何をしているのです！！

ヴィヴィ

銀石公に何をしているのかと聞いておりますの！！！

ピシッ、ピシピシッ！！

ヴィヴィ

許しませんわ！！ 絶対に許しませんわ！！！

ヴィヴィ

あなたが何者であろうと関係ありませんわ！ 殺して差し上げます！！！

ドクン、ドクン、ドクン――！

ガシャアアアン！！！

EPISODE 2

銀色の殻を破って

パアアアッ――！

ニフェル

はあ？

ヴィヴィ

ぎ、銀石公――？

教主

ううっ……まぶしい……！

教主

卵が割れて……銀の竜族が飛び出してきたのか？

ヴィヴィ

銀石公――！！

ニフェル

ずいぶん絶妙なタイミングだね。

ニフェル

よりによって、私が卵を割ろうとした時に生まれるなんて。

ニフェル

もしかして……私が殻を破る手助けをしてあげた、ってことかな？ 面白いね。

???

黒く沈んだ闇を照らす光。

???

その明るさは、朝を呼び覚ます陽光のごとく……

???

硬き温もりが、優雅に世界へ広がらんことを！

???

その光輝が、この世すべてを照らす時まで！

シルヴィアナ

お初にお目にかかります。わたくし、シルヴィアナ・アルゲントゥムと申します！

ぺこり――！

ヴィヴィ

シ、シルヴィアナ……アルゲントゥム？

ニフェル

お～、たった今目覚めたばかりのわりには、ずいぶんおしゃべりな子みたいだね？

ニフェル

少し面倒なことになったね。

ニフェル

こういう時はどうすればいいか悩むから、少しぼんやりしていたいところだけど……

ニフェル

別に私の目的は変わっていないし……こっちへおいで、シルヴィアナ。

ヴィヴィ

いけませんわ、危険です！ 行ってはなりません！ こちらへ来なさい、銀石……いえ、シルヴィアナ！

教主

そ、そうだ！ 私たちが守るから、ニフェルから離れるんだ、シルヴィアナ！

シルヴィアナ

あら、あら〜。困りましたわね。

シルヴィアナ

殻を破って出てきたばかりのわたくしに、これほどの注目が集まるだなんて。

シルヴィアナ

いつも夢見ていた光景ではありましたけれど……

シルヴィアナ

少しばかり、気後れしてしまうと申しましょうか？ オホホホ！

ヴィヴィ

え、ええ？

ニフェル

はあ？

教主

あの口調……妙に少し違うけど……

教主

あの仕草と言葉遣いは、まるで……

シルヴィアナ

さあさあ〜、まばゆき真銀の信奉者たちよ。

シルヴィアナ

そなたたちの熱烈なる声援は、よく分かりましたが……

シルヴィアナ

わたくしは、呼ばれたからといって、ほいほいついていく物知らずの子供ではございません。

シルヴィアナ

わたくしが行きたい場所は、わたくしが決めるもの。

シルヴィアナ

みだりに竜族の大公へ、ああしろこうしろと命じないでいただきたいですわ。

教主

竜族の……大公……？

教主

そ、それってどういう？ 君、今生まれたばかりだろ。

シルヴィアナ

違いますわ、教・主・様。

教主

え？ 君……私が誰か知ってるの？

シルヴィアナ

ええ！ 当然でございます。

シルヴィアナ

わたくしは竜族として、卵を破って出るべき時を過ぎた者……

シルヴィアナ

地下に埋もれていたその時の、いつからか、わたくしはすでに目覚めておりました。

シルヴィアナ

卵の中で多くを見聞きしながら、時を待っていたのでございます。

シルヴィアナ

本来わたくしは、黄金大公と肩を並べるはずだった真銀の序列。

シルヴィアナ

長き時のあいだ先延ばしにされてきた、約束されしわたくしの運命を、今こうして生まれ、取り戻そうというのを、誰が止められましょう？

シルヴィアナ

教主様としてのそなたの権威は、わたくしも認めるところではございますが……

シルヴィアナ

教主様にもまた、わたくしの権威をお認めいただきたいものですわ。

ヴィヴィ

卵の中で……すべてを聞いていたと？

ヴィヴィ

そ、それなら……

ニフェル

ふむ……。

ニフェル

シルヴィアナ。

ニフェル

こっちへおいで。

ニフェル

君は、生まれる運命じゃなかった。

ニフェル

勘違いしないでほしいね。

ニフェル

君に約束された運命なんて、なかったんだよ。

シルヴィアナ

あ〜、それも違いますわ。

ニフェル

はあ？

シルヴィアナ

陰気な幽霊よ、竜族はいつ生まれると思っておいでですか？

シルヴィアナ

鉱脈を流れていた力が集まり、凝り固まって、竜族の卵となるのです。

シルヴィアナ

竜族の運命とは、卵から始まるもの……そなたはご存じないのですか？

シルヴィアナ

わたくしは、その時からすでに、生まれるほかない運命を授かっていたのです！

ニフェル

それは戯言だね。

ニフェル

君たち竜族……君たちの卵は、ただ偶然に固まった石ころにすぎない。

ニフェル

私に屁理屈を並べるつもりなら、相手を選んでからにしてほしいな。

ニフェル

“私”の論理は、世界の何よりも冷たいからね。

……

シルヴィアナ

ああ～！ 嘆かわしいことでございます！

ぎゅっ――！

ヴィヴィ

え、ええ？

シルヴィアナ

生の素晴らしさを知らぬあなたが、哀れでなりませんわ！

ニフェル

な、何？

シルヴィアナ

この、ほのかな温もりを感じたこともないのですか？

シルヴィアナ

取り合った手から、互いの肌を伝って流れる温もりが何なのか、感じたことはございますか？

ジジジッ、ジュウジュウ――

ニフェル

それは温かいんじゃなくて、熱いんじゃないかな？

シルヴィアナ

あああっつ～！ 熱いですわ！

ヴィヴィ

わ、わたくしに触れないでくださいまし！

シルヴィアナ

うっかり忘れておりましたわ！ 水銀と触れるとこうなるのだということを！

シルヴィアナ

ともかく、幽霊よ！

シルヴィアナ

誰かの胸に抱かれた時、ほかほかと湧き上がる心地よい気だるさを感じたこともないのでしょう？

シルヴィアナ

笑いたい時に共に笑ってくれる者もおらず、泣きたい時に頭を預ける者もいないのですか？

シルヴィアナ

ああ〜！ なんとおいたわしいことでしょう！

ヴィヴィ

シ、シルヴィアナ――！

ニフェル

……いったい何をしようとしているのか、分からないね。

ニフェル

少し混乱してきたよ。

シルヴィアナ

はい、わたくしにも分かりません。

ニフェル

ん？

シルヴィアナ

ですが、ただひとつ。変わらぬ、きらめく真実。

シルヴィアナ

わたくしは知っております。

シルヴィアナ

そなたは、もう手遅れだということを。

ニフェル

え？

シルヴィアナ

今さら何ができるというのです？

シルヴィアナ

わたくしはもう生まれてしまったのですから、そなたにはもう、できることなどございません。

シルヴィアナ

まさか、あの強大なる世界樹がそびえ立つこの地で……

シルヴィアナ

明るく輝く夜明けのように芽吹いた、生の炎を消そうというのですか？

ニフェル

さあね。

ニフェル

あまり何も考えていないように見えるけど？

ニフェル

私がここまで来たのに、ただ放っておいているじゃない。

ニフェル

私が何をしても、あまり反応はなさそうだけどね？

ニフェル

あの蛇を連れていった時も……何もなかったし。

シルヴィアナ

幽霊よ、本当にそうお思いですか？

シルヴィアナ

それならば、なぜ……そなたは先に動かないのです？

教主

……？

教主

考えてみれば……今まであいつが見せてきた力なら……私たちが何をしようが、あいつが自分で連れていけば済むはずなのに……。

教主

君……迷ってるんだな、そうだろ？

教主

最初からそうだった。

教主

そうだ！ 最初は君自身が出てきもしなかったじゃないか。アイシアをそそのかして、代わりにやらせたんだろ？ それから少しずつ大胆になっていった。

ヴィヴィ

そ、そういうことですわ。

ヴィヴィ

今になってまで、わざわざ説得や脅しばかりしているのを見るに……

ヴィヴィ

実際にやってしまった時、どうなるか分からなくて迷っているのですわ。

ニフェル

それに今さら気づいたの？ 本当に早いね。

ニフェル

もちろん迷うよ。

ニフェル

私をあの荒野へ追いやったのは、あいつだったからね。

ニフェル

ん〜、これはちょっと困ったことになったね。

ニフェル

手の内がばれてしまった、というか。

ヴィヴィ

それならあなたは……わたくしたちに手出しできませんわ。

ヴィヴィ

すべて無駄になったのですから、今すぐわたくしたちの前から消えなさい！

ニフェル

ふむ。

ニフェル

そうしようかな？

ニフェル

でも、勘違いはしないでほしいね。

ニフェル

私が君たちに手出しできないのは、たしかだけど……

ニフェル

君たちも私に手出しできないのは、同じだから。

（画面暗転）

シャアッ――

教主

はぁ……ビビった。

教主

いつ以来だろう、あんな圧迫感を覚えたのは。

教主

言っていることや行動を見る限り、死の幽霊なのは間違いなさそうだけど……これからが心配だな。

教主

思ったより大人しく引き下がった。

教主

他のみんなは眠ってしまったけど……

ヴィヴィ

姉さん……！ シオン姉さん！ クロエ！ 起きなさい！ 起きなさいったら！

教主

あの時の妖精たちと同じ感じで、眠りに落ちたのか？

シルヴィアナ

ふふ。ご心配には及びませんわ。

シルヴィアナ

わたくしたちへぬるく近づいてきた時と同じように、幽霊はすぐに自らの影響力を引っ込めるはずでございます。

シルヴィアナ

世界の主がそびえ立つこの地で、好き勝手に暴れることなどできないでしょうから。

教主

そうだな。今、引き下がったみたいに。

シルヴィアナ

コホッ、コホッ……！ くしゅんっ！

シルヴィアナ

うう、温かかった卵を離れて外に出たからでしょうか？ 少し肌寒いですわ。

EPISODE 3

銀色の殻に閉じ込められて

教主

ひとまず眠りに落ちたみんなは、見たところ異常はなさそうだ。

教主

心配しすぎずに、少しだけ待ってみよう、ヴィヴィ。

教主

みんな、すぐに目を覚ますはずだ。

ヴィヴィ

ありがたいですわ、教主様。

ヴィヴィ

あの、助けを頼もうと思って連絡してみようかと……

ヴィヴィ

姉さんや妹のスマホのパスワードは分かりませんし……

ヴィヴィ

教主様は、もしかして……その、スマホをお持ちではありませんの？

教主

え？ ああ……

教主

私が一度、電話をかけてみ……

教主

あ、まずい……画面が割れたのか？ 画面がまったく反応しなくて、何も分からないな……

教主

ここは大きなビルだし、電話がないか私が探してみるよ。

教主

エレナでもヒルデでも、連絡できれば誰かは助けに来てくれるだろう。

教主

シルヴィアナと一緒に、ここを守っていてくれ。

ヴィヴィ

はい……心配なさらず行ってらっしゃいませ。

教主

うーん……ヴィヴィも不安定に見えるし、銀の竜族が卵を破って出てきたのも大ごとではあるけど……

教主

まずは意識を失ったみんなを見てから、順番に解決していこう。

シルヴィアナ

教主様は、本当にお忙しい方のようでございますね。

シルヴィアナ

殻の中で、音の響きとしてだけ聞いていた時はよく分かりませんでしたが……

シルヴィアナ

あの大きなお姿で行ったり来たりなさるのをこの目で見ると、わたくしまで疲れてしまいますわ。

ヴィヴィ

銀石……いえ、シルヴィアナ……

シルヴィア

ああ〜、ヴィヴィアナ。どうか普通に「シルヴィア」とお呼びくださいませ。

ヴィヴィ

あなたは、わたくしのことを知っているのに……なぜ何も言わないの？

ヴィヴィ

卵の中で全部聞いていたのでしょう？ わたくしに何か言いたいことはありませんの？

シルヴィア

ふむ……

シルヴィア

ヴィヴィアナ・アルゲントゥム……

シルヴィア

本来なら銀の巣となるはずだった場所を、水銀で満たし、わたくしの誕生を阻んだ方。

シルヴィア

この世界に与えられた銀の運命を仮面としてまとい、さまざまな……多くのことをなさった方。

シルヴィア

最初は……とても恨んでおりました。

シルヴィア

わたくしがある時、意識を取り戻した時には、破れるはずの殻が破れぬまま、閉じ込められ続けていたのですから。

シルヴィア

そなたが世界樹と世界を呪う独り言を口にするたび……

シルヴィア

いつかこの卵から出たなら、「わたくしが一息にそなたを打ち倒してみせる！」と思っておりました。

ヴィヴィ

わたくしは……ごめんなさい……

シルヴィア

ですが……わたくしが聞いていたのは、冷たい呪いの言葉ばかりではございませんでした。

シルヴィア

わたくしは、そなたのすべての悩みと悲しみ、孤独も聞いておりました。

シルヴィア

ですから、こう思ったのでございます。

シルヴィア

そなたに与えられるべきものは、裁きではなく慰めなのだと。

シルヴィア

わたくし、真銀の竜族。

シルヴィア

毒を洗い流すことこそ、わたくしの使命。

シルヴィア

その運命に従い……そなたを許すと申し上げます。

ヴィヴィ

シルヴィア……！

シルヴィア

大丈夫でございます……お母様。

ヴィヴィ

シルヴィア〜！！

シルヴィア

コホッ、コホッ……！

ヴィヴィ

え？

シルヴィア

コホッ……くしゅんっ！

ヴィヴィ

その咳……さっきもしていましたわ！

ヴィヴィ

わ、わたくしのせいなの？

ヴィヴィ

もしかして、わたくしが近くにいると影響を受けて……？

ヴィヴィ

それとも、わたくしがあの住処に満たしていた水銀……

ヴィヴィ

卵だった時から、ずっとその影響を受けていたからなの？

シルヴィア

それは……よく分かりません。

シルヴィア

……ただ少し寒いだけ、かもしれませんし？

ヴィヴィ

ああ……わたくしのせいで……やはりそうだったのですわ……！

ヴィヴィ

ううっ……うう……

シルヴィア

お母様！？ お母様！！！ どこへ行かれるのですか？

シルヴィア

お母様の姉妹の方々を、このまま放っておくわけにもいきませんし……

シルヴィア

いったいどうすればよいのでございましょう？ ああ〜困りましたわ！

ニフェル

そう、困るだろうね。ヴィヴィも君にとって、君もヴィヴィにとって。

シルヴィア

ひっ？

ニフェル

入れ替わった運命のまま、長い歳月を過ごして……

ニフェル

今になってようやく直視することになった、お互いの立場。

ニフェル

ああ〜、なんとも惨めなことでございますね〜

シルヴィア

わたくしの口調を、そのように真似しないでくださいまし！

シルヴィア

そなたは礼儀というものをご存じないのですか？

ニフェル

どうして？ 面白そうだからやってみたんだ。

ニフェル

まあ、別に面白いのかは分からないけど。

シルヴィア

なぜまだここにいるのですか？

シルヴィア

世界樹が怖くて、尻尾を巻いて逃げたのではございませんの？

ニフェル

ごめん。尻尾があるのは君の方で、私にはないんだよね。

ニフェル

それに……私はあいつを、別に怖いと思ったことはないよ。

シルヴィア

怖くないですって？ 本当に虚勢を張るのがお上手でございますね。

ニフェル

虚勢じゃないよ。

ニフェル

言ったよね。君たちは私に手出しできないって。

ニフェル

あいつも、私に手出しできなかったんだ。

ニフェル

もちろん……その逆も不可能だったけど。

ニフェル

でもさ。

ニフェル

最後には、誰が勝つと思う？

シルヴィア

な、何を言っているのですか？

ニフェル

ふふ、私は知っているんだ。

ニフェル

すべての運命の果てで、結局残るのは私だけだってことを。

シルヴィア

そ、それはどういう？ いったいどうして分かるというのですか？

ニフェル

私は、そうなるように作られたから。

ニフェル

あいつは、私を作り出してからずっと後悔していた。

ニフェル

制御不能の怪物だとか……

ニフェル

耐えがたい悪意の実体だとか言いながら。

ニフェル

妖精の司祭たちが私について気づいた時なんて……

ニフェル

真実を知られるのがあまりにも恥ずかしく、恐ろしくて、隠すのに必死だった。

ニフェル

「私が答えを見つけるまで、これは秘密にしておかなければならない」と、固く言い含めながらね。

ニフェル

でも……それは司祭たちにとって、よいことだったのかな？

ニフェル

現実から目を背けたまま生きていれば……私の領域へ、より早く近づくことになると知っていたのかな？

ニフェル

そう、知らなかったんだろうね。

ニフェル

私も、後になって知ったことだから。

ニフェル

本当に面白い世界だよ。

シルヴィア

そなたは、「面白い」の意味を少しおかしく捉えているようでございます。

ニフェル

違うよ。面白いんだ。

ニフェル

視点の違いにすぎないよ。

シルヴィア

ふん。

ニフェル

どうして？ 面白くない？

ニフェル

私と一緒にいる時間が……ひどく嫌に感じるの？

シルヴィア

別に、そういうわけではございませんが……

シルヴィア

いったい何をしたいのか分からないのでございます。

シルヴィア

なぜわたくしの前に現れて、このような意味のない会話をなさるのですか？

ニフェル

さあね。

ニフェル

私にもよく分からない。

シルヴィア

はあ？

ニフェル

ただ……何というか……

ニフェル

わざわざ長く待たなくてもよさそうな気がした、というか。

シルヴィア

それは……どういう意味でございますか？

EPISODE 4

銀色の殻の亀裂

その日の夜。

ウイ

エル！ 今夜の空には星がいっぱいだよ！

ウイ

寝て起きたら、明日はもっと幸せな日になりそうな気がするの。

エル

ケロ、ケロ！

ウイ

どうしたの？ エル？

エル

ケロ！ ケロ！

ウイ

え？ あっちを見ろって？ 何があるの？ あ……！

ヴィヴィ

……

ウイ

白い竜族のお友達……！

ウイ

久しぶり！ 白い竜族のお友達！

ウイ

会いたかったよ！ 白い竜族のお友達が、いつ来てくれるかなって楽しみにしてたんだ！

ウイ

最近どう？ 元気にしてた？

ヴィヴィ

わたくしも……元気に……よく、分かりませんわ。

ウイ

何かよくないことがあったの？ 顔色がよくないみたい。

ウイ

ウイとした約束どおりには、ならなかったの……？

ヴィヴィ

約束？ あ……。

ウイ

だから今度は、白い竜族のお友達が約束して。

ウイ

あのね。ウイは白い竜族のお友達に会ってから、やっと分かったの。

ウイ

幸せにも、努力が必要なんだって！

ウイ

竜族のお友達も、幸せになれるように努力してね！

ウイ

それで幸せになったら、ウイに会いに来て。

ヴィヴィ

……約束しますわ……ウイ……。

ヴィヴィ

もちろんですわ〜。ウイと交わした約束ですもの。

ヴィヴィ

わたくしたち、また会う時は必ず笑って会おうと約束したでしょう？

ヴィヴィ

全部、覚えておりましたわ……。

ウイ

ううーん……。

ウイ

竜族のお友達、あまり元気そうに見えないよ……。

ウイ

ウイの気持ちを考えて、嘘をついてくれなくてもいいんだよ。

ヴィヴィ

ごめんなさい……ウイ。

ウイ

ウイは大丈夫！ 本当に大丈夫だよ！

ウイ

教主が教えてくれたの。幸せじゃない時が終わったら、幸せになる時が来るんだって。

ウイ

だからウイは、焦らないことにしたの。

ウイ

白い竜族のお友達も、だから、もう少しだけ耐えればいいんだと思う。

ウイ

ウイ。

ヴィヴィ

ううっ……本当に幸せなのですか？ あなたは。

ウイ

え、え？

ヴィヴィ

今は、それで幸せなのですか？ 全部あれば、そんなふうに幸せになれるのですか？

ヴィヴィ

いったい、いつまで耐えればよいのですか？

ヴィヴィ

何も変わっていないように思えますわ。

ウイ

白い竜族のお友達……。

ヴィヴィ

時が経てば、よくなると思っていたのに……

ヴィヴィ

どうにか耐えて、乗り越えようとしているのに……

ヴィヴィ

何ひとつよくならない。

ヴィヴィ

どんどんひどくなっていく。

ヴィヴィ

わたくしが……わたくしがしてしまったことのせいで……この苦しみが終わらない……！ ううっ……ううう……！

ヴィヴィ

ううううう……！

ウイ

あ、あの……う……。

ヴィヴィ

わたくしも、ウイのようになれば楽になれるのでしょうか？

ヴィヴィ

すべてを忘れて、何も知らないままやり直せば、そうなれるのでしょうか？

ウイ

あ、あの……！

ヴィヴィ

……

ヴィヴィ

ウイ……ヒルデ……

ヴィヴィ

みんな、そうだった。

ヴィヴィ

記憶を消してから……もう一度、自分の人生を取り戻した。

ヴィヴィ

それが……正解なのでしょうか？

ヴィヴィ

わたくしが背負うべき責任と後悔を、きれいに忘れることが正解なのですか……？

ヴィヴィ

でも……でも……！ ううっ……！ ううう……！

ウイ

……お姉さん！

ヴィヴィ

え……？

ウイ

ウ、ウイ～？！

ウイ

ご、ごめん……すごく変だった？ ウイ、困らせたかったわけじゃないの。

ウイ

白い魔女のお友達と、黒い幽霊のお友達が……白い竜族のお友達に「お姉さん」って呼んであげたら喜ぶって言ってたから……勇気を出して言ってみたんだけど……。

ヴィヴィ

ウイ……！

ヴィヴィ

うわあああああん！！

ぎゅっ――！

ウイ

白い竜族のお姉さんのお友達……。

ウイ

少しはよくなったって……ウイ、思ってもいい？

ヴィヴィ

はい！ よくなりましたわ！ 本当に……！

ヴィヴィ

その言葉が、ずっと聞きたかったのですわ！

ウイ

そっか。本当に効果があるんだね？

ウイ

ウイの願いを一回使うより……お姉さんって一言言うほうが……もっといいみたい。

ウイ

……

ウイ

白い竜族のお姉さんのお友達、ウイがどうやって幸せになれたのかって聞いたよね？

ヴィヴィ

はい、聞きましたわ……！

ウイ

実は……ウイにもよく分からないの。

ヴィヴィ

え……？

ウイ

いつも相手が幸せになるように願って、ウイも幸せだって言ってるけど……

ウイ

ウイが本当に幸せなのかは、よく分からないの。

ウイ

最初は幸せだって信じてたの……本当にそうだったのに……

ウイ

白い竜族のお姉さんのお友達に初めて会ってから、考えることが増えたの。

ウイ

前に、ウイの四つ葉のクローバーをプレゼントして、別れた日……

ウイ

ウイは本当は……少し寂しい気持ちになったの。

ウイ

いつも幸せなら、そんな気持ちになっちゃいけないんじゃないかな？ って、エルとずっと話してみたんだけど……

ウイ

エルも、よく分からないって言ってた。

ウイ

それなら……ウイは本当は幸せじゃなかったんじゃないかな？

ウイ

そういうことを考え続けていると……

ウイ

ウイ、少しばかみたいに感じるの。

ヴィヴィ

ウイ！ ウイはばかではありませんわ！

ウイ

うん、そうだよね？ ううん……ウイも、そう思いたい。

ウイ

……

ウイ

お、お姉さん。

ウイ

ウイは……願いをむやみに使わないって、教主とも、エルとも、ウイ自身とも約束したけど……

ウイ

本当に幸せになる道が、それしかないと思ったら……ウイに会いに来て、言ってね。

ウイ

ウイは……お姉さんに幸せでいてほしいの。

ウイ

お姉さんがそう言うなら、ウイは願いを叶えてあげる。

ウイ

お姉さんは……ウイの大切なお友達だから。

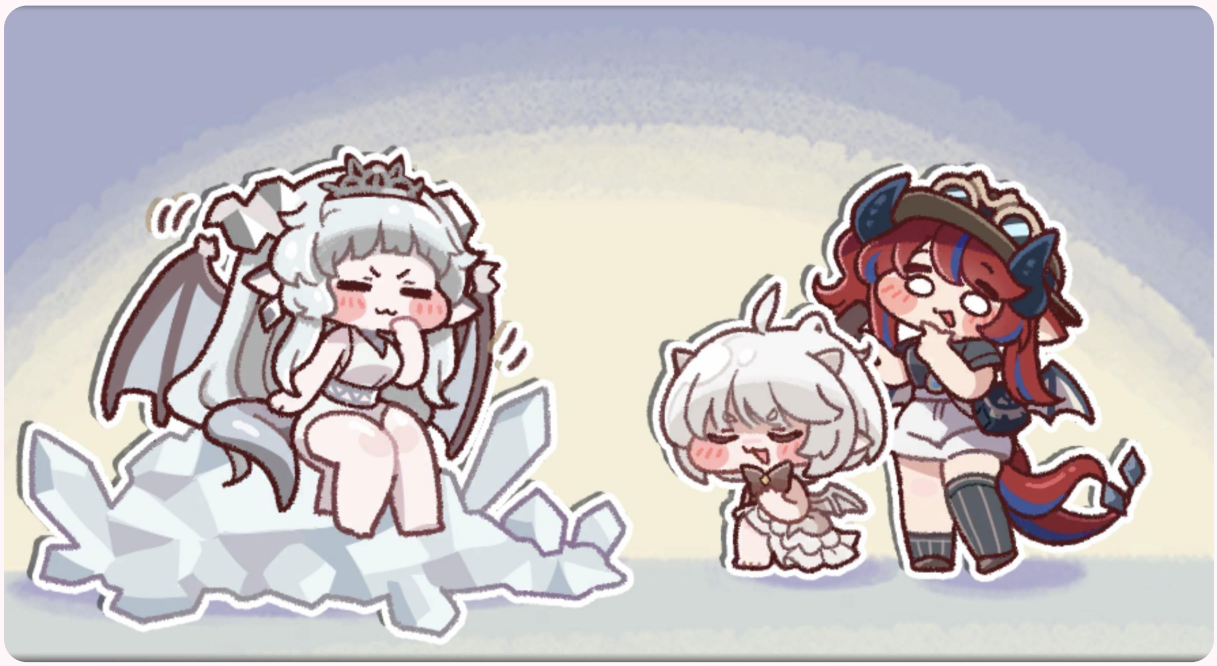
—次のお話—

EPISODE 5

銀色の殻パズル

ネティ

コン、コン――



ネティ

ふうむ……これ、本当に純度の高い銀ですね。

ネティ

むやみに自分を「真銀」だと言っているわけじゃないって感じがしますヨン！

シルヴィア

オホホ！ その通りでございます。

シルヴィア

わたくしは見た目だけでなく、心の内まで清らかな真銀の化身！

ネティ

はい、はい〜。本当にそうですヨン。

ネティ

最初はオパールみたいに、頭のどこかがパキッとひび割れて、そんな変な口調を使っているのかと思いましたヨン！

シルヴィア

コホッ、コホッ……！ んんっ！ 失礼いたしました。

ネティ

咳をするところまで、ヴィヴィにそっくりですヨン。

ネティ

誰に育てられて、そんなふうに卵から出てきたのか、よーく分かりますヨン。

ダーヤ

……んんっ！ それで、シルヴィア。お前の話によると……地上でひと騒ぎあったということか？

シルヴィア

その通りでございます。ダイヤモンド殿下。

ダーヤ

はぁ……何にせよ、教主も実に苦労が多いことだな。

ダーヤ

連絡をくれていれば、私もすぐに駆けつけて助けたものを……

シルヴィア

事態があまりにも差し迫っており、その暇がございませんでした。

シルヴィア

差し当たって急な状況はすべて解決しましたので、そこまでご心配なさらなくてもよいのでございます。

ダーヤ

そうか。それなら何よりだ。

ダーヤ

事態が収まった時、被害者たちを病院へ運び、教主と共に教団へ戻ったと言っていたな？

シルヴィア

エルフたちはすぐにモナティアム病院へ搬送され……

シルヴィア

残りは教主様が、直接教団まで運ばれたのでございます。

ダーヤ

教主が眠った者たちを、モナティアム大型マートのショッピングカート二台に乗せて、教団まで引いていったと言っていたか？

シルヴィア

はい、その通りでございます。わたくしも一台を自ら押してお手伝いしましたので、この言葉に一片の偽りもございません。

ネティ

……

ネティ

これ、完全に〜、モナティアムで放送している本格大河フュージョン時代劇『エレナ大王と三千人の秘書』の一場面になってますヨン。

ネティ

アラグニアまで来たら、何だかパズルが完成する気がしてきますヨン。

ダーヤ

はぁ……

ダーヤ

それはそうと……ヴィヴィがまたどこかへ消えたとは……この件、どうしたものか。

シルヴィア

ダイヤモンド殿下、あまりご心配なさらないでくださいまし。

シルヴィア

教主様が事情をくみ、戻ってきさえすれば教団で追加の処罰はないと仰って……

ダーヤ

！？ その程度のことはすでに予想している。

ダーヤ

教主は実に優しい者だ。十分にヴィヴィを理解してくれると思っている。

ダーヤ

私が心配しているのは……ヴィヴィ自身の状態だ。

ダーヤ

最近のヴィヴィは、昔の姿を思い出せないほど不安定に見えた。

ダーヤ

教団で謹慎しながら働き……教主やお前の世話をするようになれば、少しは落ち着きを取り戻すと思っていたが……

ダーヤ

またこんなことが起きて姿を消したのなら、何をしでかすか分からない。

ダーヤ

いつかすべてのことに区切りをつけ、この地下へ戻り、同族たちと共に過ごしてくれることを願っていたが……

ダーヤ

やはり、それは私の空しい願いにすぎなかったのか……？

ダーヤ

実に残念だ。ひとまず竜族たちを集めて、一緒にヴィヴィを探すとしよう。

シルヴィア

……承知いたしました。わたくしも喜んで参加いたします。

ダーヤ

シルヴィア、すまないな。

ダーヤ

本来なら、お前の誕生を記念して歓迎序列戦を行うはずだったのだが……

ネティ

ええっ？ それ、やらないんですかヨン？

ネティ

ダーヤ様の宮殿の前庭に、オパールをプチプチと宅配用の緩衝材でぐるぐる巻きにして縛っておいたんですけど？

シルヴィア

わ、わたくしたち竜族は、そのように初戦を行うのでございますか？

ダーヤ

あ、違う！ 誤解だ！ そんなことは、ジェイドの属性序列降格セッション以降はやったことがない！

ダーヤ

なぜわざわざそこまでしたのだ、ネティ？ オパールがあまりにも可哀想ではないか。

ネティ

生まれたばかりのシルヴィアがあまりに小さいので、そのくらいのハンデは必要だと思ったからですヨン。

ダーヤ

はぁ……早く行ってオパールをほどき、ヴィヴィの捜索に参加してこい。

ネティ

はーい、分かりましたヨン〜

ダーヤ

ではシルヴィア、支度をしてゆっくり出てくるといい。私は先に出発する。

シルヴィア

承知いたしました、ダイヤモンド殿下。

シルヴィア

……

シルヴィア

お母様……いったいどこへ行かれたのでしょう。

ニフェル

君を見るのがつらかったんだろうね。

シルヴィア

……幽霊よ、いったいいつまでわたくしについてくるおつもりですか？

シルヴィア

こんなことをしたところで、わたくしがすぐにそなたについて行くと思っているのなら、大きな間違いでござ……

シルヴィア

コホッ、コホッ……！ んんっ！

ニフェル

ふうん。生まれた時から咳ばかりしている、小さくて病弱な竜族か。

シルヴィア

そ、それが何だというのでございますか？

ニフェル

ヴィヴィの真似をしようってコンセプトじゃないなら……それ、かなり変だって分かってるよね？

シルヴィア

何が変だというのか分かりません。

ニフェル

エーリアスで、そんなことが起こり得るのかな？

ニフェル

ヴィヴィは本当に厄介な子だから、自分であんなことをしでかしたけど……

ニフェル

ヴィヴィだって、生まれた時は何の異常もなく健康だったはずなんだよね。

シルヴィア

……

ニフェル

何？ 何かおかしいって、今さら気づいたの？

ニフェル

そう、その通り。

ニフェル

君みたいに生まれたばかりの子が、そんな病を抱えているのは、本当に妙な現象だよ。

ニフェル

まるで……世界樹の力が弱まったとか……もしかすると、また……

ニフェル

ふむ。急に少し気になることができたんだけど。

シルヴィア

ツン―― え、ええ？ コホッ……！ コホッ！ コホッ！！

シルヴィア

サッ―― うああ……コホッ！ はぁ、はぁ……！

シルヴィア

わ、わたくしにいったい何を……！

ニフェル

ほう……ツン――

シルヴィア

コホッ……！ コホッ、コホッ！ ぐあっ……！ サッ――

ニフェル

おおー！ えいっ。

シルヴィア

ゴホッ！

ニフェル

えいっ。

シルヴィア

ゴホッ！

ニフェル

えいっ。

シルヴィア

ゴホッ！

ツン、サッ！

シルヴィア

いったい何度、同じことをなさるのですか！！

ニフェル

どうしてここまでしても……現れないんだろう？

ニフェル

ちょっと不思議な疑問が湧いてきちゃった。

ニフェル

いくら弱まっているとはいえ、自分の世界を私が壊してしまうのは嫌がるはずなのに……

シルヴィア

サアアッ―― 本当に……理解できませんわ。

シルヴィア

あの幽霊は、わたくしに何を望んで、こんなことをするのでしょう……！

シルヴィア

いつまでも、こうしてやられっぱなしでいると思っているのでしょうか？

シルヴィア

次にまた現れたら……必ず思い知らせて差し上げますわ！

EPISODE 6

銀色の殻の痕跡

ダーヤ

ヴィヴィ！

ダーヤ

ヴィヴィ、どこへ行ったのだ？ 早く出てくるのだ！

ダーヤ

声の聞こえる方へ来るのだ！

ネティ

ヴィヴィ、どこにいるんですかヨン～

慌てた竜族

ダーヤ様！ こちらです！ こちらに誰かいるみたいです！

ダーヤ

何だと？ どこだ？

ダーヤ

ああ……ただ通りかかった野生動物のようだな。

ダーヤ

ヴィヴィがあんなふうに、四つ足で素早く走り回るはずもない。

ネティ

急いでいたら、四つ足で走り回ることもあるんじゃないですかヨン？

ネティ

オパールが最近、手足を全部使う四足タップダンスを練習しているって聞きましたヨン。

ダーヤ

そ……ヴィヴィはそんなことはしない。

ダーヤ

はぁ……このままではきりがないな。

ダーヤ

教主からは何か知らせはないのか？

慌てた竜族

はい、ダーヤ様。モナティアム方面へ向かわれた教主様も、まだ見つけられていないようです。

慌てた竜族

念のため、今もう一度連絡してみます。

ダーヤ

ああ、そうしてくれると助かる。

ダーヤ

教団に迷惑をかけているようで、心苦しいな。

シルヴィア

ふむ……

シルヴィア

お母様は、どこへ行かれたのでしょう。

シルヴィア

以前、住処から……外出なさる時がありましたが……

シルヴィア

たしか……よく行かれる場所が、精霊たちの住む場所の近くだと聞いたことがあったような……

シルヴィア

もしかすると……お母様がいつも優しく話しかけていた、あの小さな精霊なら……

シルヴィア

その精霊……湖の近くに住んでいると言っていましたわね？

シルヴィア

湖も話に聞くだけでは実感が湧きませんでしたが、本当に広いのでございます。

シルヴィア

日もだんだん暮れてきていますのに……

シルヴィア

小さなものでも構いませんから、お母様の手がかりが見つかればよいのですが。

シルヴィア

あっ？ あれは……！ お、お母様！ やはりこの近くにいらっしゃったのですか？！

ヴィヴィ

シルヴィア？

ヴィヴィ

なぜここに……？ ああ……わたくしを探していたのですか？

ヴィヴィ

これ以上、わたくしをお母様と呼ばないでくださいまし。

ヴィヴィ

どうせわたくしたちは……本当の母娘でもありませんわ。

ヴィヴィ

むしろ、その逆でしょう。

ヴィヴィ

わたくしは、あなたが生まれることすら阻んでいたのですから。

シルヴィア

ですが、お母様……

シルヴィア

たとえそうであっても……お母様と娘でいることはできるのではございませんか？

ヴィヴィ

何……？

シルヴィア

殻の向こうで、お母様がお母様のお母様である傲慢なお婆様について、語っておられるのを聞きました。

シルヴィア

偶然聞いたお話ではございましたが……

シルヴィア

それでもお母様は、今もその方をお母様と呼んでおられるではありませんか？

ヴィヴィ

お、お母様の話はやめなさい！

ヴィヴィ

わたくしのお母様は、お母様と呼べるようなお母様ではありませんのに！ うぶぇべっ！

ヴィヴィ

そ……その変な口調も、もうやめなさい。

ヴィヴィ

無理にわたくしの真似をしようとしないで。普通に話していいのですわ！

シルヴィア

わ、わたくしの口調が変だとおっしゃるのですか？ どうしてそのようなことを……！

ヴィヴィ

え？ わざとではなかったのですか？

ヴィヴィ

う……と、とにかく！

ヴィヴィ

もう何も重要ではありませんわ。

ヴィヴィ

わたくしは……去るつもりです。

シルヴィア

はい？ それはどういう意味でございましょう……？

ヴィヴィ

あなたも、わたくしのことは忘れてくださいまし。

ヴィヴィ

明日の朝を過ぎれば……わたくしは何も覚えていないでしょうから。

ヴィヴィ

わたくしがしてしまったことも……

ヴィヴィ

遠い昔、わたくしが竜族になったことも……

ヴィヴィ

わたくしが生まれた、あの時のことも。

ヴィヴィ

すべてを忘れて、何も知らない白紙になって……

ヴィヴィ

もう苦しむことも、誰かを苦しめることもなくなるのですわ。

シルヴィア

お母様！ それはどういうことでございますか？！

ヴィヴィ

お母様と呼ばないでと言ったでしょう！

ヴィヴィ

わたくしにその資格はありません。

ヴィヴィ

ダイヤモンドは、あなたを竜族の淑女として育ててほしいと言っていましたが……

ヴィヴィ

あなたはもう、わたくしよりも輝いている子ですわ。わざわざ、わたくしのようなものと関わる理由などありません。

ヴィヴィ

あなたもよく知っているでしょう！ わたくしが何をしてきたのか……！

ヴィヴィ

なら、ただわたくしを憎んで、捨てなさい！

シルヴィア

……

シルヴィア

それの何が違うというのですか、お母様？

シルヴィア

お母様が恨んでいたお婆様のしたことと、何が違うのでございますか！

シルヴィア

どのように記憶を失おうとしているのかは分かりませんが……

シルヴィア

そのようにしてこの世界とわたくしを捨てることは、お婆様がなさったことと同じではございませんか？

ヴィヴィ

な……？ ち、違いますわ……そうしようとしているわけでは……

シルヴィア

お母様……

ヴィヴィ

な、何をしているの？ 離しなさい！

ヴィヴィ

そんなことをしたら、あなたの手が痛むだけですわ！

シルヴィア

お母様！

シルヴィア

もう、ただ……ご自分をお許しくださいませ。

シルヴィア

そのような選択をなさったら、お母様を見守っていた姉妹の方々はどうなさるのですか？

シルヴィア

教団の裁判で、義ある方々が力を尽くして助けてくださったことも、無駄になってしまうではありませんか？

シルヴィア

犯した罪は、内省と反省の中で少しずつ受け止めていくもの……

シルヴィア

重くのしかかる罪悪感と後悔は、家族や友と共に軽くしていくものなのでございます。

シルヴィア

どのような方法を使おうとしているのかは分かりませんが……

シルヴィア

どうか、おやめくださいませ！

ヴィヴィ

うう……ううっ……！

ニフェル

お母様〜、お母様〜、お母様〜、お母様の話が尽きないから、まあまあ、あらまあ、お母様、まあ大変、お母様、あらまあ〜

ヴィヴィ

ひゃっ？！ あ、あなたは……！

ヴィヴィ

なぜここにいるのですか！ なぜまだ、わたくしたちの前に現れるのですか？！

シルヴィア

あの幽霊……ずっとわたくしについて回っていたのでございます。

ヴィヴィ

何ですって？ なぜ？ いえ……どうして？！

EPISODE 7

銀色の殻の残像

ニフェル

大丈夫。気にしなくていいよ。ひとまず、やっていたことを続けて。

ヴィヴィ

気にしないでいられるわけがないでしょう！

ニフェル

それなら……気にするといいよ。

ヴィヴィ

急に現れて、なぜ言葉遊びなどしているのですか？！

ニフェル

何であれ、君が何をしようと、どうせ変わるものなんてないからね。

ニフェル

ふむ、記憶を失ってやり直す、か……

ニフェル

ヴィヴィ、記憶を失えば幸せになれると思う？

ヴィヴィ

……！

ヴィヴィ

気にしないでくださいまし！ あなたが気にすることではありませんわ！

ニフェル

んー、そう言わずに。

ニフェル

ただ一度、答えてみてよ。

ニフェル

君の主張どおりなら……どうせ記憶を失った時、私のことも忘れるわけだから……

ニフェル

今ここで何を言っても、別に構わないんじゃない？

ヴィヴィ

……

シルヴィア

お答えになる必要はございません、お母様。

シルヴィア

あの幽霊に、会話のきっかけを与えてはならないのでございます！

ニフェル

シルヴィア、そんなに邪険にしないでよ。

ニフェル

私はそんなに憎たらしいの？

ヴィヴィ

幸せに……なれるかは分かりませんわ。

ニフェル

お。

シルヴィア

お母様……！

ヴィヴィ

ですが……幸せになる機会は得られると思っています。

ニフェル

ヴィヴィ、面白い話をしてあげようか。

ヴィヴィ

何……何の話ですの？

ニフェル

君とまったく同じことを言った子が、いつかいた気がするんだ。

ニフェル

あまりに昔のことだから、ぼんやりしているけど……

ニフェル

本当に奇遇なことに、その子は君と同じ血筋だったような気がしてね。

ヴィヴィ

な……何ですって？！

ニフェル

だから、私が連れていった。

ニフェル

願いを叶えてあげると言ってね。

ヴィヴィ

はぁ……？ あなた……まさか……！ あなたが……！ あなたが……

ヴィヴィ

あなたが末っ子を……！！！！

ヴィヴィ

あの忌々しい願いを口にさせたのは、あなたでしたの？！！

ニフェル

勘違いしちゃいけないよ、ヴィヴィ。

ニフェル

願いを言ったのは、その子だってば。

ニフェル

……変だな、名前が何だったか思い出せない。

ニフェル

まあ、いいか。どうせ、それほど興味があったわけでもないし。

ヴィヴィ

ただではおきませんわ！ 絶対に許しませんわ！！！ 殺して差し上げますわ！！！！！

ニフェル

んー、そんなに心配しなくてもいいってば。

ニフェル

あそこには、その子と良い友達になってくれる子がいるから。

ニフェル

気性の荒い友達もいるから、少し心配ではあるけど……

ニフェル

まあ、それでも皆、あそこで楽しく遊んでいるんじゃないかな。私の知ったことではないけど。

ヴィヴィ

うう……うあああああっ！！！

ヴィヴィ

あ……？

ヴィヴィ

ゴホッ……！ くあ……うああっ！ ゴホッ……！ ゴホッ……！

ヴィヴィ

うああ……痛い……も、もう……！ ああ……！

シルヴィア

あ……だめ……！

シルヴィア

お、おやめくださいませ！

シルヴィア

お母様！ だめです！！！ お母様を放してくださいませ！！

ニフェル

ふうん。

ニフェル

ヴィヴィ、痛い？

ヴィヴィ

ううっ……はぁっ……ゴホッ！！

ニフェル

君が望んだことじゃなかったの？

ニフェル

記憶を失って、やり直すんでしょう。

ニフェル

このくらいは耐えられないといけないんじゃないかな？

シルヴィア

幽霊よ！ これのどこが記憶を失うということなのでございますか？

ニフェル

記憶を失って、自分を失う……

ニフェル

それって……

ニフェル

……死ぬのと同じじゃない？

ヴィヴィ

ああうっ……うう……うああっ……！

ニフェル

ふむ〜、エーダル〜。どこにいるの？ ここに出てきてみない？

ニフェル

君が一番大事にしている玩具のひとつでしょう。

ニフェル

これでも出てこないの？

ニフェル

ふうん〜、どうして出てこないんだろう？

ニフェル

ひとつでは足りないのかな？

ニフェル

んー、あといくつ残っていたっけ？ ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ……

ニフェル

五つだったかな、六つだったかな？

ニフェル

別に興味がないから、いつも分からなくなるんだよね。

ニフェル

どうかな、ヴィヴィ。君の次は誰がいいと思う？

ニフェル

誰に手を出せば、君の母親は怒って飛び出してくるかな？

ニフェル

うーん……一番上？ それとも……二番目？

シルヴィア

お母様から離れなさいませ！！

ヴィヴィ

ぐうっ……！ くっ！ 殺してやる……！！！

ヴィヴィ

あ……？

シルヴィア

あ……ううっ……？

ヴィヴィ

え……？

ニフェル

ヴィヴィ、そんながむしゃらな動きで私に当たると思ったの？

ニフェル

相手を見てからやらないと。

ニフェル

何という有様だろうね。

ヴィヴィ

シルヴィア……？

ヴィヴィ

あ……シルヴィア？

ヴィヴィ

うああ……うあああ……

シルヴィア

ゴホッ、ゴホッ……！ うう……お母様……

シルヴィア

お母さん……お母さん……

ニフェル

ふむ、何だろう？

ニフェル

大げさにしないで、起きなよ。

ニフェル

どうせ一日も経てば、元どおり起き上がるんじゃないの？

シルヴィア

ゴホッ！ うう……う……

ニフェル

何だろう、この状態は？

ニフェル

お……何か感じる。

ニフェル

生まれて初めて感じる、この……

ニフェル

懐かしさは何だろう？ 混乱するな。

ニフェル

でも、嬉しい。

ニフェル

何か変だ。頭がおかしくなりそうだ……！

ウイ

白い竜族のお友達！！！

ニフェル

ん？

ウイ

叫び声が聞こえたんだけど……あれ？

ヴィヴィ

シルヴィア……違う……こんなはずではありませんの。わたくしが望んだのは、こんなことではありませんのに……！

ヴィヴィ

うあああ……うあああああん！！

ウイ

いったい、どういう状況なの……？ え？

ウイ

その子は、どうしてそんなことに……？

ニフェル

君。

ニフェル

君は何？

ウイ

え？ あ、あなたは誰？

ウイ

あなたも……お友達？

ニフェル

はあ？ 何だろう。

ニフェル

君、中身が空っぽじゃないか。どうしてこんなことがあり得るんだろう？

ニフェル

まるで……殻だけが残った卵みたいだ。

EPISODE
8

銀色の殻の欠片たち

ニフェル

こんなのは初めて見る。

ニフェル

いったい何がどうなっているんだろう？

ニフェル

生きているわけでも、消えているわけでもないね？

ウイ

ウイ……ウイから離れて！！

ニフェル

ウイ？

ニフェル

ウイ……？

ニフェル

何だろう？

ニフェル

初めて聞く名前なのに、どうして馴染みがあるんだろう？

ニフェル

ん？ ちょっと待って……

ニフェル

君、まさか……

ウイ

こ……こ、来ないで。

ウイ

怖いよ。ウイに近づかないで。

ウイ

みんな……幸せそうに見えない。

ウイ

お姉さんも……倒れている小さな竜族のお友達も……

ウイ

それに……あなたも……！

ニフェル

少し確かめないと。

ニフェル

じっとしていて。

ウイ

こ……来ないで！！！！

ウイ

ウイから離れて！ 遠くへ、遠くへ行っちゃって！！

ニフェル

パアッ！

ウイ

う……い、行ったのかな？

ウイ

お、お姉さん！ 大丈夫？

ウイ

ウイが、あの変なお友達を別の場所へ送っちゃったよ。

ヴィヴィ

ううっ……ひっ……ウイ……シルヴィア……シルヴィアが……！

ヴィヴィ

シルヴィアが動かないの……

ヴィヴィ

こんなことになってはいけないのに……お母様……お母様がそう作ったのに……

ヴィヴィ

どうして？ どうしてこうなるの……分かりませんわ。

ヴィヴィ

こんなこと、あってはいけないでしょう。

ヴィヴィ

ううっ……お母様……お母様はなぜ……！ うああ……

ヴィヴィ

約束したでしょう……良い世界を作ってくれるって言ったでしょう……！

ヴィヴィ

分からない。何ひとつ分かりませんわ。

ヴィヴィ

なぜこうなるのか、分かりませんわ。

ヴィヴィ

うああ……うあああん……！ お母様……！

ウイ

お……お姉さん……

ヴィヴィ

ウイ……シルヴィアを助けて。

ヴィヴィ

願いを叶えてくださいまし。

ヴィヴィ

わたくしの願いなんて、どうでもいい。

ヴィヴィ

シルヴィアを元に戻して。お願い……

ヴィヴィ

お願いだから……どうか……お願いですわ……ううっ……ひっ！ うああ……！

ウイ

う……

ヴィヴィ

シルヴィア？ シルヴィア……？

ゆさゆさ――

ヴィヴィ

シルヴィア！ シルヴィア、目を開けて！

ヴィヴィ

わたくしたちの末っ子が願いを叶えたのですわ……！ どうして起きないの……！

ウイ

あ……さっき……

ウイ

あの変なお友達を追い払う時に、力をたくさん使ったみたい。

ウイ

それに本当は……こういうの、ウイも初めてだから、できるかよく分からないの。

ウイ

初めて見ることだし……初めてやることだし……

ウイ

もう一度助けてほしいっていうのが……どういう意味なのか、よく分からないの。

ウイ

う……ごめんね、お姉さん……。

ヴィヴィ

ううっ……ううっ！ ううっ……！

ヴィヴィ

渡して……

ウイ

え？

ヴィヴィ

わたくしのすべてを渡して。

ヴィヴィ

わたくしに残っているものを全部……シルヴィアに渡してくださいまし。

ヴィヴィ

それなら、できるのでしょう？

ヴィヴィ

そのくらいなら、できるはずでしょう……。

ヴィヴィ

ウイ……そうでしょう？ できますよね？ そうでしょう……ねえ？

ヴィヴィ

エーダルの子……

ヴィヴィ

エルダイン……一日生きる者……永遠を生きる者……

ヴィヴィ

わたくしの力を……シルヴィアへ渡して……

ヴィヴィ

そうすれば助かる……

ウイ

な、何を言っているのか分からないよ、お姉さん……

ヴィヴィ

狼がそう言っていましたわ。

ヴィヴィ

その力を使えば、永遠の眠りから目覚められると。

ヴィヴィ

だから蛇がやったのです。

ヴィヴィ

本当にできたと聞きましたわ。

ヴィヴィ

わたくしの血をそのまま飲めば、シルヴィアはもっと苦しむだけですわ。

ヴィヴィ

でも……わたくしの力だけを渡せば、もう一度助かるのです。

ヴィヴィ

そう、そうなのですわ……！ だから、そうしてくださいまし。

ヴィヴィ

わたくしの体に残った、この力を……

ヴィヴィ

これをシルヴィアに渡して、ウイ……！

ヴィヴィ

あなたならできますわ。できるはずです！

ヴィヴィ

力のせいなのです。

ヴィヴィ

今になって、ようやく気づきましたわ……。

ヴィヴィ

お母様も、この愚かな力のせいで……ありとあらゆる過ちを犯したのです。

ヴィヴィ

わたくしも、この忌々しい力だけを信じて、愚かなことばかりしてきました。

ヴィヴィ

お母様も、わたくしも……一度だって正しく使えたことはありません。

ヴィヴィ

最初から、資格などなかったのです……！

ヴィヴィ

わたくしにはもう必要ありませんわ、こんなもの。

ヴィヴィ

だから……

ヴィヴィ

どうなっても構いませんから……！ わたくしの願いを叶えてくださいまし……！！

ウイ

……

ウイ

わ……分かった。一度……やってみるね。

ウイ

よく分からないけど……頑張ってみる。ウイが……精一杯……願ってみるね。

ウイ

……

ウイ

ウイは、いつも笑ってるって思っているけど……

ウイ

……池に映った自分の姿を見ると、どこか泣きそうな顔をしている気がするの。

ウイ

そんな気持ちになるたびに、ウイは願いを言っていた気がする。

ヴィヴィ

何……？

ウイ

ウイが幸せでいられますように、って。

ウイ

でも次の日も、その次の日も……

ウイ

毎日、池を見るたびに、ウイの顔は泣きそうに見えたの。

ウイ

それでウイはまた同じ願いを言って、また言って、また言い続けていたの……。

ヴィヴィ

うう……うわあああ！

ヴィヴィ

いったい何度……何度も……！ うあああん！

ウイ

願いをむやみに言ってはいけないって、誰かが教えてくれるまでは……

ウイ

ずっと、そうしていた気がする。

ウイ

だって……池に映った自分の姿を認めたくない時ほど……

ウイ

ウイが願いを言いたがっているんだってことに……何度も気づいてしまうから。

ウイ

でも、お姉さん。

ウイ

今は、大丈夫なんだと思う。そうだよね？

ウイ

ウイの願いを……ちゃんと使う時が来たんだよ。そうだよね？

ウイ

誰も不幸にならないでほしい。

ウイ

ウイも。お姉さんも……みんなも。

ウイ

あの小さなお友達が目を開けて起きて……

ウイ

お姉さんが明るく笑う姿を見たいの。

ウイ

だから……

ウイ

ウイが……幸せにしてあげる。

EPISODE 9

銀色の殻の中の本心

シルヴィア

う……うう？

シルヴィア

いったい何がどうなったのでございますか？

シルヴィア

頭が割れそうなほど痛いのに……

シルヴィア

どこか……力が湧いてくるような感じもして、不思議でございます。

シルヴィア

あの時……意識を失う前、確かに……

シルヴィア

お母様が、わたくしを……

ヴィヴィ

ぐうっ……！ くっ！ 殺してやる……！！！

シルヴィア

これは……！

シルヴィア

お母様が誤ってそうなさっただけですのに……！ お母様がまた気に病むことが増えてしまいました！

シルヴィア

また、そうなさってはいけませんのに。お母様……

シルヴィア

ん？

ウイ

こんにちは、小さなお友達。

ウイ

目が覚めたんだね。

シルヴィア

この声……！ そなた……そなたが、お母様といつもお話ししていたあの精霊なのでございますか？

ウイ

ウイのお姉さん……白い竜族のお友達が……あなたのお母さんなの？

ウイ

あなたは小さいけど……同じ白い竜族のお友達なんだね。

ウイ

二人、とてもよく似合っている気がするよ。

シルヴィア

お母様はどこに……

ウイ

ここ……ウイが……あそこの木陰の下まで運んだの。

ウイ

少しでも楽に眠れるように。

シルヴィア

お母様……？

シルヴィア

い、いったい何がどうなったのでございますか？

ウイ

お姉さんは……あなたのことが、とても大好きだったみたい。

ウイ

自分のすべてをあなたに渡して、こうして眠ってしまったの。

シルヴィア

はい？ ど、どうして……いえ、何がどうなったのでございますか？

ウイ

あのね……

ウイ

小さな竜族のお友達。

ウイ

ウイが……よくやったって、言ってくれる……？

シルヴィア

はい？

ウイ

ウイが……よくやったのか、分からないの……。

ウイ

誰かに言ってほしいの。

ウイ

ウイは……自分のするべきことをしただけだって。

ウイ

胸が苦しくて……何かが心の中をぎゅうぎゅう押しているみたいな感じがするの。

ウイ

だから、小さな竜族のお友達……

ウイ

ウイがよくやったって……ちゃんと、よくやったんだって。

ウイ

一度だけ……言ってくれないかな……？

シルヴィア

あ……

シルヴィア

……

シルヴィア

よ……

シルヴィア

よくやりました……ウイ……？

ウイ

……ありがとう。

ウイ

お姉さんと話し方が似ていて……だから、なんだか安心するみたい。

ウイ

ねえ、小さなお友達……こういう感じが何なのか、分かる？

ウイ

少しは……涙みたいなものを流さないといけない気がするのに……

ウイ

一度も、お友達みたいになりたいって思ったことはなかったのに……

ウイ

でも……なんだか分からないけど……今日だけは、そのお友達がうらやましいの。

ウイ

ウイも泣きたいのに……どうやって泣くのか、思い出せない……。

ダーヤ

……。まだ目覚めていないのか？

ダーヤ

他の妖精たちや、ヴィヴィの姉妹たちは目を覚ましたのではなかったか？

ダーヤ

なぜヴィヴィだけが、眠ったままなのだ？

ダーヤ

理解できない……

ダーヤ

教主……なぜこんなことが起きたのだ？

ダーヤ

本当に……待っていればヴィヴィは目覚めるのか？

教主

ご、ごめん、ダーヤ。

教主

これは私に解決できることではないけど……

教主

それでも……他のみんなが目を覚ましたんだから、ヴィヴィも起きるはずだ。きっと！

教主

あまり落ち込まないで。何か方法が見つかるはずだ！

教主

いつかは目覚めるようになっている。私はそう思う。だから希望を持とう、私たちも。

シルヴィア

……

シルヴィア

お母様。お母様の姉妹の方……つまり、わたくしにとっては叔母様になる方でしょうか？

シルヴィア

ウイ叔母様から、すべて聞きました。

シルヴィア

ですが、誰にも話しておりません。

シルヴィア

お母様が大切にしまっておきたい秘密、明かしてもよい秘密……それを判断するには、まだわたくしは早いと思ったのでございます。

シルヴィア

早くお母様が目を覚まして、皆に話してくだされば よいと思います。

シルヴィア

わたくしがシルヴィアを救ったのだと。

シルヴィア

わたくしがすべてを犠牲にしたのだと。

シルヴィア

わたくしはそれほど変わったのだと。

シルヴィア

そして皆が……明るく笑いながら、応援しながら。

シルヴィア

お母様を認めてくださる姿を、わたくしは想像しております。

シルヴィア

お母様は……多くの姿で、多くの方に記憶されているようでございます。

シルヴィア

かつて、銀の竜族の名を轟かせた竜族の誇り。

シルヴィア

王冠が孤独にならぬよう、いつもそばを守ってくれた友。

シルヴィア

少し高圧的でわがままだけれど、それでも悪くないところもあった使徒。

シルヴィア

エルフたちにとっての、動く恐怖。

シルヴィア

世界を裏切った囚人。

シルヴィア

教団で奉仕する、取るに足らない卵運び。

シルヴィア

称賛も侮辱も……どうでもよいのでございます。

シルヴィア

わたくしは、それ以上のことを知っておりますから。

シルヴィア

エルダインの力、それをもう一度お返しすれば、お母様は目覚めるのでしょうか。

シルヴィア

ウイ叔母様は……もう二度とあのようなことはしたくないと仰って……精霊の森の奥深くへ入っていかれました。

シルヴィア

人里離れた池のほとりに座り、ぼんやりと水面を見つめるばかりで、もう何もお話しになりません。

シルヴィア

お母様が目覚めて、自分を見つめて微笑み、よくやったと一言かけてくださるのを待っておられるようでございます。

シルヴィア

多くの方々が混乱し、悲しんでおります。

シルヴィア

お母様は、お母様ご自身が思っているほど……

シルヴィア

そんなに冷たい人生を歩んできたわけではないようでございます。

シルヴィア

十分に意味がございました。

シルヴィア

お母様。わたくしは、これからもお母様をお母様と呼び続けます。やめなさいと言われる、その時まで。

シルヴィア

お待ちしております。お目覚めになるまで。

シルヴィア

毎日会いに参ります。姉妹の方々と共に。

シルヴィア

ですから、約束してくださいませ。

シルヴィア

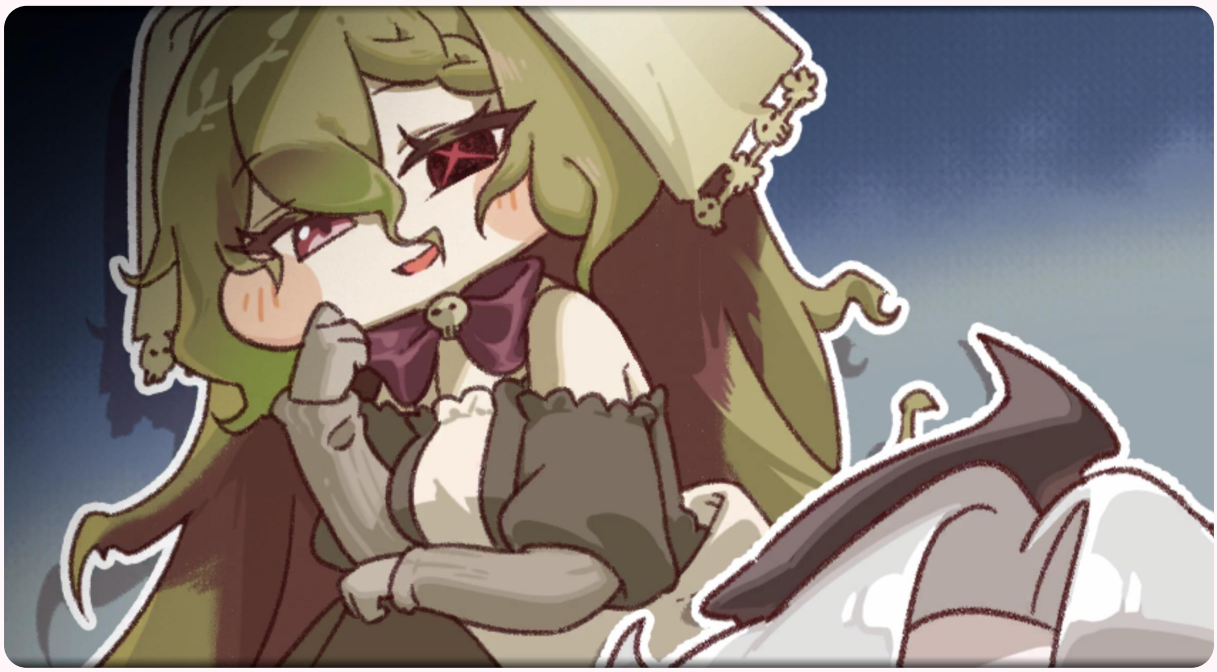
……いつか、目を覚ますと。

???

……。

ニフェル

本当にほろ苦い結末だね。そう思わない？



ニフェル

ヴィヴィ、だからどうしてあんなことをしたの。

ニフェル

結局、同じなんだね。

ニフェル

あの母親も娘も……やっていることが、あまりにも似ている。

ニフェル

ヴィヴィ、私が言ったでしょう。

ニフェル

最後に残るのは、結局私だって。

ニフェル

私から逃げようとすればするほど……泥沼にはまっていくのは君たちなんだよ。

ニフェル

ふうん〜。それじゃ……このくらいにしておこうか。

ニフェル

ひとまず、君には感謝しないとね。

ニフェル

あそこで、私自身も覚えていなかった、私が本当に欲しいものを見つけられるなんて、想像もしていなかったから。

ニフェル

だから……一度だけ見逃してあげる。

ニフェル

また泣きわめいて、何も分からないまま突っ込んで来ちゃだめだよ？

ニフェル

命は……大切なものなんだから。

ニフェル

それに、命は……ゆで卵でもあるしね。

ニフェル

銀色にきらきら輝く卵のことだよ。

ニフェル

だから……ちゃんと大事にしなよ。

ヴィヴィ

う……う？ ここはどこ……

ヴィヴィ

うう、頭が痛い……体に力が入らない……。

ヴィヴィ

ウイ……シルヴィアを助けて。

ヴィヴィ

どうなっても構いませんから……！ わたくしの願いを叶えてくださいまし……！！

ウイ

わ……分かった。一度……やってみるね。

ウイ

ウイが……幸せにしてあげる。

ヴィヴィ

え……ウイ？

ニフェル

さあ〜、それじゃ私たちの末っ子。行く準備はできたよね？

ウイ

……

ニフェル

どうしてそんな泣きそうな顔をしているの？ 何がそんなに不満なの？

ニフェル

そもそも、私から逃げて隠れたのは君だったじゃない。

ニフェル

本当に奇抜な発想だったよ。自分の記憶だけじゃなく……自分の存在そのものを消してしまうなんて。

ニフェル

私、完全に馬鹿になった気分だったというか？ 少し格好よくもあるね。まあ……格好いいが何なのかは分からないけど。

ニフェル

ピンク色の子馬のやつが、口癖みたいにそう言っていたんだ。

ニフェル

準備はできましたか、末っ子？

ウイ

誰が……あなたの末っ子なの。

ニフェル

うーん、そう、それだよ。私自身は覚えていないけれど、記憶には残っている……その姿だ。

ニフェル

さあ、それじゃ……行こう。行く時が来た。